

☆四旬節第2主日(2月28日)の聖書朗読☆※主任司祭からの解説があります。

第一朗読 (創世記 22章 1-2, 9-18 節)

その日、神はアブラハムを試された。神が、「アブラハムよ」と呼びかけ、彼が、「はい」と答えると、神は命じられた。「あなたの息子、あなたの愛する独り子イサクを連れて、モリヤの地に行きなさい。わたしが命じる山の一つに登り、彼を焼き尽くす献げ物としてささげなさい。」

神が命じられた場所に着くと、アブラハムはそこに祭壇を築き、薪を並べた。そしてアブラハムは、手を伸ばして刃物を取り、息子を屠ろうとした。そのとき、天から主の御使(みつか)いが、アブラハム、アブラハム」と呼びかけた。彼が、「はい」と答えると、御使いは言った。「その子に手を下すな。何もしてはならない。あなたが神を畏れる者であることが、今、分かったからだ。あなたは、自分の独り子である息子すら、わたしにささげることを惜しまなかった。」

アブラハムは目を凝らして見回した。すると、後ろの木の茂みに一匹の雄羊が角をとられていた。アブラハムは行ってその雄羊を捕まえ、息子の代わりに焼き尽くす献げ物としてささげた。

主の御使いは、再び天からアブラハムに呼びかけた。御使いは言った。「わたしは自らにかけて誓う、と主は言われる。あなたがこの事を行い、自分の独り子である息子すら惜しまなかったのも、あなたを豊かに祝福し、あなたの子孫を天の星のように、海辺の砂のように増やそう。あなたの子孫は敵の城門を勝ち取る。地上の諸国民はすべて、あなたの子孫によって祝福を得る。あなたがわたしの声に聞き従ったからである。」

第二朗読 (使徒パウロのローマの教会への手紙 8章31b~34節)

皆さん、もし神がわたしたちの味方であるならば、だれがわたしたちに敵対できますか。わたしたちすべてのために、その御子をさえ惜しまず死に渡された方は、御子と一緒にすべてのものをわたしたちに賜(たまわ)らないはずがありませんか。だれが神に選ばれた者たちを訴えるでしょう。

人を義としてくださるのは神なのです。だれがわたしたちを罪に定めることができます。死んだ方、否(いな)、むしろ、復活させられた方であるキリスト・イエスが、神の右に座っていて、わたしたちのために執(と)り成してくださるのです。

福音朗読 (マルコによる福音書 9章 2-10 節)

そのとき、イエスは、ただペトロ、ヤコブ、ヨハネだけを連れて、高い山に登られた。イエスの姿が彼らの目の前で変わり、服は真っ白に輝き、この世のどんなさらし職人の腕も及ばぬほど白くなった。

エリヤがモーセと共に現れて、イエスと語り合っていた。ペトロが口をはさんでイエスに言った。「先生、わたしたちがここにいるのは、素晴らしいことです。仮小屋を三つ建てましょう。一つはあなたのため、一つはモーセのため、もう一つはエリヤのためです。」ペトロは、どう言えばよいのか、分からなかった。弟子たちは非常に恐れていたのである。

すると、雲が現れて彼らを覆い、雲の中から声がした。「これはわたしの愛する子。これに聞け。」弟子たちは急いで辺りを見回したが、もはやだれも見えず、ただイエスだけが彼らと一緒にいられた。一同が山を下るとき、イエスは、「人の子が死者の中から復活するまでは、今見たことをだれにも話してはいけない」と弟子たちに命じられた。彼らはこの言葉を心に留めて、死者の中から復活するとはどういうことかと論じ合った。

朗読解説 一主任司祭より皆様へ一

庭の花々も春の気配を感じているようで、つぼみや芽吹きがはっきりわかるようになってきました。まだ肌寒い日々ですが、「早春賦」と歌の気持ちがしっくりくる頃です。今日は四旬節第二主日です。復活祭はあとひと月ほど。私たちは神さまに向きを変えているでしょうか。神さまに向きを変えずに断食とか節制を実行しても無駄になります。ぜひ、朝、目が覚めた時、夜、眠りにつくとき神さまを思い浮かべましょう。神さまはいつも私たちを思ってください。その思いが一致することが大切です。

第一朗読（創世記 22章 1-2, 9-18 節）

アブラハムとイサクの物語が朗読されます。大変劇的な物語ですので有名な画家レンブラントもその光景を描いています。なかなか子どもが授からなかったアブラハムに一人息子のイサクが生まれました。しかし神はその一人息子を「焼き尽くす献げ物」とするよう命じます。約束の子を献げよということです。アブラハムは動揺しますが、自分の気持ちより神を優先してイサクを犠牲にするべくモリヤの地に向かい、息子を献げようと刃物を振り上げます。その時主の使いが現れて、イサクの命を助けます。アブラハムの身から出た子どもが天の星のように、浜の砂のように大いに増えるであろうという神のことはこうして保たれたのです。アブラハムの信仰の強さが神に受け入れられたのですが、これは同時に、神の独り子イエスを父なる神は人間の罪からの救いのために死に渡されたことと対になっているのです。父である神の人間への思い、愛がそこにはあるのです。

第二朗読（使徒パウロのローマの教会への手紙 8章31b～34節）

この手紙でパウロは神はその独り子さえ惜しまないほどに、私たちを守ってくださっていると述べています。私たちを取り巻く敵に対してこれほど力強い方が私たちのために執り成しておられるのです。だから主イエスをお頼みしましょうと私たちを激励しているのです。そのイエスは十字架上で死んだのですが、父である神はイエスを死に打ち勝って復活させられました。そして、そのイエスを私たちのために執り成す方となされたのです。

福音朗読（マルコによる福音書 9章 2-10 節）

イエスは 3 人の弟子を連れて高い山に登られたとマルコは伝えています。高い山とはどこの山と特定するよりも、神に近づくという意味があります。ですからこの時のイエスは三人の弟子を特別に神に近づけ、ご自分が神とどのような関係にあるかを教えようとしたのではないのでしょうか。ですから、山に登られたイエスは 3 人の弟子の前でお姿が変わられ、真っ白に輝か

れ、二人の預言者と話し合っておられたとマルコは伝えています。そして雲が現れて、その雲の中から「これは私の愛する子。これに聞け。」と声がしました。聖書の中では雲は神の現れのしるしと言われています。このような出来事でイエスは三人の弟子たちに何を教えようとされたのでしょうか。イエスとともにいた弟子たちは当時のユダヤ人たちの中でいろいろと攻撃されていました。手を洗わないで食べているとか、あなたの先生はちゃんと税金を納めているのかとか。弟子たちはある意味不安だったのです。この先生についていって大丈夫なのかと。イエスは弟子たちの不安を鎮め、宣教するにふさわしい自信を持たせようとされたのだと思います。また、この後、ご自分は多くの人の反感を買って殺されるということを弟子たちに告げますが、その時に躓かないように、イエスは父である神と一体なのだという事を見せようとされたのではないかと思います。イエスの心配りが垣間見える出来事です。

PS

一都三県以外の緊急事態宣言は解除されるようです。東京はまだまだのように感じます。3月は1年の仕事や学業の締めくくりでもあります。お互いの苦労を分かち合いたくと思いますが、大人数がそろっての会食は避けたほうがよろしいと思います。この苦しさを四旬節の献げものとしましょう。その分を「四旬節の愛の献金」としてはいかがでしょうか。

「ビール🍺チャレンジ」は実行中です。

カトリック足立教会
主任司祭 野口重光